――特集・「生活」というまなざし――〈民俗〉的方法を介して――

自然と生活

――古代和歌における生活の中の風、歌の中の風――

近藤信義

はじめに

風の名の採集は近年困難な課題の一つである。さまざまな要因があるが土地々々の生活の変化が最も大きく、また言語の標準化が追い打ちをかけている。柳田国男「風位考」[1]から関口武『風の事典』[2]（昭和六十年）まで、その間約半世紀強、関口氏はしばしば風の名の消滅に言及している。海上の生活者も陸の生活者もかつての風害に十分耐えるほどの機械力と堅牢さを持つ船・家屋、また東西南北の方位による均一的な命名法によって、地域的な生活者の記憶に根ざしている風の名は忘却の一途である。かつての風の名が無形民俗文化財的な存在にすらなろうとしている現状からは、生活という側面をどのようにアクセントをつけて捉えてみるか、そこから万葉歌の読みへの提言ができるか、試行的な報告として提出してみよう。

信州諏訪地方は御柱祭を追いかけている内に多少縁が深くなったような気もしているが、さりとて何ほどのことが分かっているのか心許ないが、今回の古代文学の特集への参画をこんなところから始めてみようと思う。

一、風の名　その1

諏訪大社の御柱祭に用いられる薙鎌（なぎがま）と呼ばれる神器は長い年月の間に形も素材もすっかりシンボリックになり、現在のデザインではすでに「鎌」のイメージを離れてしまっている。しかし、博物館や古社に伝わるものを見ると、年代的なプロセスの中でその容姿の変遷をたどり返していくとあきらかに、農具であるところの鎌に戻ることができる。しかし、農具の鎌がそのまま神器であるわけではなく、神器たるべく鎌は祭事において質を改めねばならない。

御柱祭における薙鎌は神木の見立てが完了した折りにこの鎌を幹に打ち込んで、神木決定の標しとするというように抽象度の高い用いられ方を見いだすのだが、鎌を打ち込んだ「木」が神の宿る木とする幻想こそ基本の構図であろう。したがって、神木が鎌を受け入れることによって鎌の持つ威力も保証されるのである。「薙鎌」は鎌の威力を示す名称である。すなわちこのナギ（グ）にはナグル・ナギハラフ・ナギナタなどのように横方向に強い力を与えて切り払う意と、朝（夕）ナギ・ナグ

ム・ナグサなどのように穏やかに和む意との両義を有していると考えてよいと思われる。

その意義を示すものとして風を鎮める力をこの鎌に託した祭儀が能登にあった（拙稿「諏訪大社御柱祭の薙鎌について―日室・戸土・金丸の祭事を追って」[3]参照）。石川県七尾市江泊日室の諏訪神社（通称鎌宮）、石川県鹿島郡鹿西町金丸の諏訪神社（鎌宮）、同鹿島町藤井の諏訪神社、この地には八月二十七日（旧暦七月二十七）に鎌打ちの神事が行われる。とりわけ日室においては、「風鎮祭」とよび、神鎌二丁を七尾市山王町の大地（おおところ）神社において入魂し、それを用いて鎌宮（拝殿は西向き）の脇にあるタブの木の左右に打ち込むのである。長年用いられたタブの木には無数の鎌の先が残り異様な相貌の木となっている。この祭りは、鎌を高く掲げておくと暴風が避けて行くという信仰に基づくものであって、季節的には台風シーズンに合致している。さらに、この地方では西からの風（「クダリ」）は季節を問わず畏れられ、特に漁師は西風にさらわれたら終わりと今も言っている。北からの風を「アイの風」と呼び、海から吹くので暖かく、アイの風に当たるところは雪が積もらないと言って好感を持っている。この祭りの祝詞には「…風鎮メノ御祭リ仕ヘマツリ、聞コシ召ス天ノ下ノ大百姓人作ル物ニ、悪シキ風荒キ水ニ遭ハセマサズ…」と唱えられ祭りの意義（後注（6）「龍田風神祭祝詞」参照）がよく示されている。この風当たりの強そうな七尾湾に突き出た半島の小さな村の、村人の集う祭儀に触れていると、風鎮めへの期待が生活の根本と深く関わっていることに気付かされる。

諏訪地方では昭和四十年頃までは大風の予報が出たとき、あるいは強風の中で、草刈りの鎌を竿に結びつけて刃先を風の方向に向けて高く立てていたという記憶を語ってくれる古老がまだまだいる。こうした風習はおそらくもっと採取できるであろうが、聞き及んだ一つに尾張一宮周辺でも昭和四十年頃まであったという。

これら民間の風習は、風鎮めの祭りの背景を考え合わせるよい機会となる。風害を畏れる心は、風害を鎮める超自然に向かう能力を持つ力（祈り・神器）に期待が込められる。風は人の能力を超えた圧倒的な外部性（暴力）を発揮するものとして対象化され、それに立ち向かうものが鎌である。鎌が風を薙（和）ぐ力を持つと信じられ、人々の祈願の心を形に表した。先の金丸の諏訪神社（鎌の宮）の由来には、神代の昔、此の地は毒蛇がはびこっていたが大己貴命・少彦名命を建御名方命が先導し、「弥柄鎌ノ鋭鎌」をもって草木を薙ぎ払い、力を合わせてことごとく毒害のものを退治した、よって、建御名方命は二神からこの地の鎮護を命じられ「金丸の洲端」に鎮座することとなった、これにちなんで村人各自が七月の二十六日二十七日に神前に鎌を奉納した、と語り伝えている（『金丸村史』）。鎌が信仰の対象となる話としてはわかりやすいが、なぜ風に関わり始めたのか。風習と信仰との双方向的力学がここには隠されているように思える。

諏訪には、鎮めを必要とする畏るべき風、一つは冬季、西北から吹き下ろしてくる「塩嶺おろし」があり、季節を問わず南西方向（赤石山系・天竜川を通路とする）から吹いてくる「伊

那おろし」があり、秋季、南東（赤石山系と南八ヶ岳の間を通路とする）から吹いてくる「辰巳かぜ」は台風と重なった場合しばしばすさまじい風害、例えば土蔵の屋根をすっぽり吹き上げて十数メートル飛ばす、といった顕著な風があった。方位を干支で表す風の名も多く、地域の地形を考慮するとその特色が表われてくる。

『風の辞典』によれば「〇〇おろし」は全国的に内陸に見られる風名で、冬季、主に山地（付近の目立つ山）から吹き下ろしてくる風という。伊吹おろし、鈴鹿おろし、比叡おろし等々その地名ともども冬の厳しい風の印象を持っている。「塩嶺おろし」も全国的な採集事例の中に位置づけると同様の特徴を示しており、むしろ季節を問わずに畏れられている「伊那おろし」が異例な呼び名と言えよう。諏訪は盆地であるところの地形から風の道が山間と町中とでは異なっている、と言ってこの地方の風の特徴を語ってくれるが、こうした現象は各地の風に観測されるところでもある。先の能登の日室では「アイの風」を北からの風としているが、この日本海側に広く呼び慣わされている「アイ・アユ」の風の名は、富山湾一帯だけでも沿岸の地域毎に様々な方位からの風の名となっている。このことは、従来からも注目されてきており、とりわけ〈この風だけは「の風」を下に附けて呼ぶ習わし〉（『風位考』）と注目し、「風ばかりの名では無かった」ところの由来が考えられている。「アイ（アユ）の風」が好もしい風と受け止められている背景には、柳田の推量するような海辺へもたらされる彼方からの珍物への驚きがあるのかも知れない。しかし、その風の名は、柳田が一旦否定した「鮎」にかかわる説も、「あゆ（鮎）の稚魚を含んだシラスの湧く時期に因っているのでは」（黒川総三）[4]と改めて提出されている。風の名は季節と風位と生業が絡んで微妙な関係にあると言えるようだ。

二、風の名　その2―あゆの風―

風の名は地域の生活者に伝えられている在地の知恵の一部のようなものだ。旅人は何らかの契機をもってその名を知ることになる。「あゆの風」を詠った万葉時代の大伴家持はその一つの典型的な例と言える。

『風の辞典』によれば「あゆの風」は日本海側に広く分布する風名で、「沖から吹いてくる風」との説明がある。この風がとりわけ意味があったのは江戸時代の松前船の航海で、春から秋にかけて日本海を西に向かう船がこの風を順風として利用したという（この事例は図表化されて詳しい）。その逆方向の風をクダリと呼んだ。

万葉歌の「あゆの風」は越中守時代の大伴家持の三首の歌である。

aかき数ふ　二上山に　神さびて　立てる栂の木　射水川
　清き河内に　出でたちて　わが立ちみれば　東の風　い
　たくし吹けば　水門には　白波高み　妻呼ぶと　洲鳥は
　騒ぐ　葦刈ると　海人の小舟は　入り江漕ぐ　梶の音高
　し…　⑰四〇〇六

b東風（越の俗語、東風謂之安由乃可是也）いたく吹くら
　し奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ　⑰四〇一七

c東風（あゆ）を疾み奈呉の浦廻に寄する波いや千重しきに恋ひ渡るかも　⑰四二一三

aは天平十九年四月税帳使として一時都に出立した折りの歌、したがって暦の上からは夏となる。風位は射水川河口付近を立地条件とすれば北東ないし北からの風となる。bは天平二十年春正月二十九日の四首中の一首。cは天平勝宝二年五月に京の丹比の家に贈った歌。アユを「東風」に当てている。これらの歌の内容から見ればアユの風は生けるものの営みを、すなわち漁の賑々しい様子が歌われている。とりわけcの「奈呉の浦」は家持の国守の館に近く、現在の富山湾の新湊西方一帯となり、方角的にも「東風（あゆ）」は北東から北よりの風となろうが、当該歌が浦に幾重にも波を運んでいる情景の詠出は、柳田が指摘した海浜に珍物をもたらす風の印象を有していると言えよう。

「あゆの風」は諸注釈中『万葉集全注』[5]に詳しく、「東風は必ずしも東だけではない、北から東、北西もある、春風ということを暗示する意図によると思われる。『禮記』月令の「東風解氷」（東風が吹きそめて氷を解かし）を踏まえたもの」と注する。ただし、この注には若干の補説が必要と思われる。この風位に関する注には富山湾一帯に多くの事例の後付があるが、指摘された「春風ということを暗示する意図」が重要なのである。むしろ、家持が「あゆの風」を「東風」に当てたところに問題が潜んでいるといえようか。つまり、「東風」は方位に拠っているか、あるいは「東（はる）風」に拠っているか、家持の心意が重要なのである。富山湾一帯の「あゆの風」の方位が多様であることは、国内諸事情を巡行・監察する国守の立場から考えても十分承知している事柄であろう。また、季節に限定されていないことも彼の実作が示している。にもかかわらず、「東風」と当てたのはなぜか。

一方、「東風」は万葉ではコチと呼び「アサコチ」と詠む二首の例があり、それぞれこの風の特色を見せている。次の例は季節は秋、用字は「朝東」とあって「東」をコチに当てる。コチを東風とする認識に拠るものであろう。

春日野の萩は散りなば朝東（あさこち）の風にたぐひて此処に散り来ね　（秋雑）⑩二一二五

都の郊外「春日野」の萩に吹いている風である。

次の歌は「朝東風」を「アサコチ」と読み、先の歌の風の名を補う関係にある。序は川筋の堰の景と思われ、やや激しい風の印象がある。ただし、季節の趣はわからない。

朝東風（あさこち）に井堤越す波の外目にも逢はぬものゆゑ滝もとどろに　（寄物）⑪二七一七

アサコチが熟語として風の名となっている例は『風の辞典』に多く見いだす。その場合、対となる風の名が、たとえば「アサゴチ―ヒル○○―ユウ○○」と一日に風向きの変わる地域の捉え方があり、日常的・生活的に捉え込んだ呼び名である。また、コチの風位は全国的な採取例では「東より」の風であって、北・北東・南東の風向きを指している地域も多い。季節も国内各地の事例は四季に渉っている。したがって、万葉歌の場合も都城のある奈良の地を中心とした風位、即ち東よりの風の名を示しているのであろう。

ただし、先のb歌の家持の注から単純に、都ではコチと呼ぶ

東の風を、「越の俗語」ではアユノカゼと呼ぶ、すなわち方言化して置き換えたと読むべきではないと思われる。b歌が正月末の詠作であって、しかもこの歌に限って「越の俗語、東風謂之安由乃可是也」と注した意味を考えるべきであろう。「東風謂之安由乃可是也」と注する必然が国守家持にはあったと考えられるからである。

越中と都との風土の異なりを家持は「ほととぎすと橙橘」とによってしばしば取り上げているが、とりわけ雪に封じられる長い冬季をこの地で三度体験することになっていることを踏まえておくべきであろう。そうした都とは異なる北国の生活風土の中で、人々の生業を可能にするのは、この土地でしばしば言葉に上る「あゆの風」であったと思われる。「あゆの風」への期待は冬季からの解放を意味していることを国守家持の認識としてあったと見るべきであろう。加えて知的に作用するのが指摘にある「東風解氷」の東（ハル）の到来を示す四字熟語であろう。家持は風向きよりも「東（ハル）風」の文字にこだわって新たに生業が開始される季としての「春」を意図していると捉えるべきであろう。越中の風土の特性を知的（都会風）に結び合わせて都人に伝えようとした、ここには家持のアレンジが隠されていると言える。

三、風祭り―〈祈願体〉―

風を鎮める願いの風習と神祭との関係はまさに力学的だ。風害の影響を受けやすかった時代の生活といっても画一的なものではない。古代においても海人と呼ばれる海上・海浜生活者、旅人、農を主とする陸上の生活者それぞれ風との関わりの中で生活がある。

万葉歌の中の風祭りの例として高橋虫麻呂歌集歌の次の歌を取り上げてみよう。Ⅰ、は平城京から龍田を越えて難波に出向した際（天平四年か）の歌。Ⅱは難波から龍田を越えて帰京しようとする際の歌（ただし、前歌の帰路ではない）。

Ⅰ　春三月に諸卿大夫等、難波に下りし時の歌二首　并せて短歌

d白雲の　竜田の山の　滝の上の　小桜の嶺に　咲きをを
る　櫻の花は　山高み　風し止まねば　春雨の　継ぎて
し降れば　秀つ枝は　散りすぎにけり　下枝に　残れる
花は　しましくは　散りな乱れそ　草枕　旅行く君が
還りくるまで　⑨一七四七

反歌

eわが行きは七日は過ぎじ竜田彦ゆめこの花を風にな散ら
し　⑨一七四八

f白雲の　竜田の山を　夕暮に　うち越え行けば　滝の上
の　櫻の花は　咲きたるは　散りすぎにけり　含めるは
咲き継ぎぬべし　彼方此方の　花の盛りに　見えねども
君が御行は　今にしあるべし　⑨一七四九

反歌

g暇あらばなづさひ渡り向つ峯の櫻の花も折らましものを
⑨一七五〇

Ⅱ　難波に宿りて明日還り来し時の歌一首并せて短歌

h島山を　い行き廻れる　川ぞひの　丘辺の道ゆ　昨日こ

そ　わが越え来しか　一夜のみ　寝たりしからに　峯の上の　櫻の花は　滝の瀬ゆ　激ちて流る　君が見む　その日までには　山下の　風な吹きそと　うち越えて　名に負へる杜に　風祭りせな　⑨一七五一

反歌

i い行会ひの坂の麓に咲きををる櫻の花を見せむ児もがも　⑨一七五二

右の二群六首は往路帰路旅人がそれぞれ龍田の風神をモチーフとし、櫻の花への期待を詠んでいる。Iのd「…下枝に　残れる花は　しましくは　散りな乱れそ　草枕　旅行く君が　還りくるまで」、e「…竜田彦ゆめこの花を風にな散らし」とあって、風神への祈願が歌われている。fgは前歌を補う内容。IIhは「…君が見む　その日までには　山下の　風な吹きそと…名に負へる杜に　風祭りせな」と龍田風神の杜への祈願の趣を詠んでいる。

「龍田彦・姫」は龍田風神祭祝詞に称えられる風神である。日本書紀には天武四年（四月）「癸未遣二小紫美濃王、小錦下佐伯連廣足一祠二風神于龍田立野一。」とあり、ついで五年に「春正月夏四月戊戌朔辛丑祭二龍田風神、廣瀬大忌神一。」とある。この地は大和川の流れに沿って、大和から河内へ抜ける通路としてその境界を地形的に形成している。以降、持統天皇五年六月には「辛巳（十二日）、天皇至二自吉野一、甲申遣二使者一祭二廣瀬大忌神與、龍田風神一。」とあり、さらに同月「辛酉（二十三日）、遣二使者一祭二龍田風神、信濃須波、水内等神一。」とあって国家的祭祀としての風神祭が龍田と信濃の国で執行されていたことが知られている。因みに信濃国は「信濃国諏訪郡南方刀美神社一座（名神大）・建御名方神及妃八坂刀賣神（同）」「水内郡建御名方富命彦神別神社（名神大）」とある。

龍田風神祭祝詞には風害を防いで五穀豊穣を祈願する。その祈願の趣は「…皇神の御心に平らけく聞しめして、天の下の公民の作り作る物を、悪しき風荒き水に相はせたまはず…」[6]に表されている。延喜式によれば風神祭は四月・七月に執り行なわれる。この祭りの意義は国土全体を風害から守ること、全国各地の生活を荒らす悪しき風からの保全を意図する王権の祭祀である。したがって、ここには地域に吹く個別の風は抽象されているわけである。

万葉歌はこの著名な祭祀を担う杜を春三月にたまたま通過する折りに「風祭り」を行おうと詠んでいるのである。旅の途上の祭祀のありようをよく示しているわけだが、このI・IIには龍田山の櫻に吹く風へ向けての祈願である。この表現に留意して行くとそこには〈祈願体〉とでも呼べるような祭神への呼びかけがある。祝詞にも「悪しき風　荒き水に　相はせたまはず」とあるが、その祈願の趣を個別の山、この歌の場合は龍田山に吹く風への祈願として言葉を拓いた感がある。〈祈願体〉とは人が神に向かう心の言辞化であって、それが祝詞や歌となって表されているのである。神が人に向かう場合は命令となる。願いという心性の言辞的位相である。

この〈祈願体〉とみなす表現を追ってみると、次のような事例を上げることができる。Aはその祭祀対象が明瞭にわかるもの、Bは祭祀対象は定かではないがその〈祈願体〉を歌詞に取

り込み（傍線部分）、神祭的発想を内包していると見なせる歌である。

A

i大君の　命かしこみ…住吉の　現人神　船の舳に　領き給ひ　着き給はむ　島の崎々　寄り給はむ　磯の崎々荒き波　風に遇はせず　恙なく　病あらせず　急けく還し賜はね…　⑥一〇二〇

j海原に浮寝せむ夜は沖つ風いたくな吹きそ妹もあらなくに　⑮三五九二

kそらみつ　大和の国…住吉の　わが大御神　船の舳に領き坐し　船艫に　み立ちいまして　さし寄らむ　磯の埼々　漕ぎ泊てむ　泊泊に　荒き風　波に　遇はせず平けく　率て帰りませ…　⑲四二四五

l青海原風波なびき行くさ来さ障むことなく船は早けむ　⑳四五一四

右の歌のそれぞれ作歌事情は、iは石上乙麻呂が土佐に流された折りの女の歌、したがって個的な思いだが、航海神である住吉神への祈願。jは遣新羅使が難波の御津から出発に際しての歌。公的な役を担った使者としての立場から航海神（おそらく住吉神）への祈願の歌。kは天平五年入唐使（大使藤原清河）に贈った歌（作主未詳）。公的性格を帯びた歌と言える。ここで詠われる住吉神への祈願の詞句はiと類句関係にあり、表現としての同質感がある。lは天平宝字二年二月十日、渤海使の餞宴の折りに用意していた家持歌。ただし何らかの理由で未誦に終わったが、公的性格を帯びる必然にあった歌と言える。一首全体が安全祈願の表現。おそらく航海神住吉神への祈願であろう。

B

mわが背子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家にいたるまで　⑥九七九

n大海に嵐な吹きそしなが鳥猪名の湊に舟泊つるまで　羈旅作　⑦一一八九

o朝凪に来寄る白波見まく欲りわれはすれども風こそ寄せね　寄海　⑦一三九一

p海の底しづく白玉風吹きて海は荒るとも取らずは止まじ　寄玉　⑦一三一七

q大海の水底てらししづく玉斎ひて採らむ風な吹きそね　寄玉　⑦一三一九

r秋風は継ぎてな吹きそ海の底奥なる玉を手に纏くまでに　寄玉　⑦一三二七

s佐保山を凡に見しかど今見れば山なつかしも風吹くなゆめ　寄山　⑦一三三三

t秋風は疾くとく吹き来萩の花散らまく惜しみ競ひ立つ見む　詠花　⑩二一〇八

u妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くな又顧みむ　寄物陳思　⑫三〇五六

右のmは坂上郎女が姪家持に与えた歌、またsは「佐保」に縁ある人の歌であろう。この二首、「佐保風」、「佐保山」に籠められた心はともども地縁の神への呼び掛けと見なすことができるようである。そのように見るとn「猪名の湊」も旅中、通過

する土地神へ呼びかけた祈願と読め、ｏｐｑｒｔｕも同じく土地神への祈願が心意として籠められていると読めよう。つまり、ここには旅中という日常を離れた位置からの発想が神祭を内包するような表現となることを示している。これは先の〈祈願体〉とした諸例と心意は等しく、またその様式を示しているといえよう。

四、おわりに―風の名―その3にかえて

右のｍ「佐保風」のような土地の名を持つ風は万葉歌の特色である。他に「明日香風」①五二、「伊香保風」⑭三四二三、「泊瀬風」⑩二二六一、「白山風」⑭三五〇九、「比良山風」⑨一七一五などが見いだせる。それらは地域にとってどのような風なのか。例えば「比良山風」。琵琶湖一帯では比良オロシ、比良ハッコウと呼ぶ冬から春先にかけて比良山系から吹き下ろしてくる北西の風がある。在地の生活者にとっては殊の外怖ろしい風の代名詞でもある。しかし万葉歌には「ささなみの比良山風の海吹けば釣する海人の袖かへる見ゆ」と旅の景として写されている。比良オロシと見なすような緊張感は歌われていない。旅人にとって旅先で出会った風は在地の神との接触を体感することなのであろう。そこに旅人の触れあった土地での存在感が示される。そのように見ると「明日香風」も「伊香保風」も「泊瀬風」も旅人にとって、土地神の表情の顕れとして捉えられていると言うことであろう。

風が歌われる万葉歌は集中およそ二〇〇首弱、その半数は季節の中で歌われる。とりわけ秋風は季節歌中の八割を占める。因みに春風は一割五分の存在。この偏りは万葉以降の和歌文学に引き継がれることになる。季節歌と旅の歌とは重なる場合もあるが、風の歌の残り半数は旅の景として歌われる。こうした旅先の表情を写す風の中で、旅人は風に安全を祈願する歌を詠む。風が通過する土地々々の神の顕れとする心性に因るのであろう。風の歌が〈祈願体〉をとって一つの様式が見いだされる由縁である。

注

(1) 柳田国男「風位考」全集二十巻　論文は昭和五年・六年頃の発表。

(2) 関口　武『風の辞典』一九八五年二月　原書房
参考　高橋順子『風の名前』二〇〇二年五月　小学館
市川健夫『風の文化誌』平成十一年二月　雄山閣

(3) 拙稿「諏訪大社御柱祭の薙鎌について―日室・戸土・金丸の祭事を追って」立正大学人文科学研究所年報　別冊十一号　平成八年度参照

(4) 黒川総三「あゆのかぜ私見」（万葉八十二号　昭和四十八年十月）

(5) 橋本達雄『万葉集全注十七巻』有斐閣　昭和六〇年六月

(6) 「龍田風神祭祝詞」の全文は長大だが次の祈願部分は先の日室の諏訪神社の風神祭祝詞と共通している。
「……天の下の公民の作り作る物を、悪しき風荒き水に相はせたまはず、皇神の成し幸はへたまはば、初穂は、瑞(みず)の上に高知り…」（『古事記　祝詞』より　日本古典文学大系一　岩波書店）